

「金木駅」

櫛引 八千代



平成十五年十二月二十五日『金木交流プラザ』金木駅完成

平成十五年六月一日、衣更えである。道行く女学生の制服の白さが目映い。この日は実家の母の用事で、黒石へ向かう為駅へと急いでいた。ものの二分とかからない距離ではあるが、いろいろと出掛ける前の家事に手間取り、時間ぎりぎりに家を

夕闇のせまる頃にはランプが点され、はげしく揺れ動いた。乗客の顔がその陰影で、何か物語りめいてくるのが印象的だったようだ。

文明開化の匂いを運ぶ汽車には、喜びばかりではなかったのだ、その頃は戦地へと送り込まれる男達と、別れた家族の悲哀もまた滲んでいたのである。歓呼の声に送られ祖国の為の出兵、運よく戦地から帰還されたのもこの駅、また骨箱でひっそり着いたのもこの駅と、戦争体験者達の話である。

今解体された駅舎は、昭和三十五年に建て替えられたもので、ちょうど私が金木に来た年である。目の前で解体される駅舎を見ながら当時のことが脳裏をよぎる。婚礼の日はタクシーで来たものの、まだ自家用車のない時代であり、里帰りはいつもこの駅から五所川原まで行き、五能線へ乗りかえ川部まで、次に黒石線に乗り黒石に着けば今度はバスで行くという不便さであった。

駅の近くに住む私にとって、今も忘れられない光景が眼裏にある。駅の構内から金木営林署の貯木場へと引き込み線があり山から伐り出されたひば材が所せましと積まれて、毎日貨車に丸太を積み込む男達が幾人も働いていた。

その他貨車には、米、りんご、葉萁、肥料、飼料、雑貨類が積み降ろしされ、駅は毎日活気に溢れていた。

世の中はおりしも高度成長期にあり、集団就職で町を離れる者、または出稼ぎに出る者、そして五所川原へ買物に行く人、

出る。その途中で、ある老婆と出会う。毎朝のごとく駅へ来ては乗客の降り降りを見ているという。そしてこの老婆は私と同郷だと聞いている。また「太宰治」の生家である津島家とゆかりの人でもあった。

ところが、この日の朝の金木駅は、いつもと様子が違っていった。何やら騒然とした人の動きが目に入る。窓枠を外す人、釘を抜く音、物を運ぶ人、ヘルメットを被った作業員達が、それぞれの持ち場で働いていたのだ。

私はアツそうかと思った。駅舎の老朽化に伴う新築の為、解体工事が行われていたのだった。老婆は一瞬立ちどまって見ていたが、怪訝そうな顔をして、今来た道を引き返していった。毎日この老婆を駅へと向かわせたものは、一体何だったのだろうと思いつつながら汽車に乗った。

金木郷土史によると、津軽鉄道が開通されたのは昭和五年とある。それまでは五所川原へ行くにも、夏は馬車、冬は馬櫓のほか交通の便がなく、吹雪が続けばこの地方独特の雪の「なぐれ」によって、交通が途絶えたのであった。地元住民の念願であった鉄道の夢が実現し、沿線の人々の喜びはたとえようないものであった、とある。

その頃の客車は、明治さながらの古色蒼然たるもので、どこかの古いものを買い取った客車らしく、今のように真ん中に通路がなく、横並びに客席があり、座席ごとに入出口がついており、乗客は皆カニのように横歩きになって乗り降りしたとある。

鯀ヶ沢より行商にくる女達、通勤通学で朝の時間帯の駅は、ごったがえしていた。やがて世の移り変わりと共に車社会となり、町の基幹産業である、農業、林業の衰退と共に津軽鉄道もまたしかりである。

今では冷房のきいた客車に変わり、夏は風鈴列車、秋は鈴虫列車、冬はストーブ列車などと地域の観光にひと役買っている。思いにふけっているうちに汽車は五所川原に着いた。今年の十二月に完成を待つ駅舎は金木町の新しい顔として、どんなドラマを見つづけてゆくのだろうか。

ふるさとに

母を泣かせた駅がある 八千代（平成十五年六月）

津軽言葉の謎

その二、津軽語は、同意味でも、二つ三つもの言葉が存在する。

「狭い（せまい）」という意味でも、「へバコイ」「へメ」「へマコイ」等という。

また「兄（あに）」のことを、「あんさま」「あんちよ」「あんぺ」「あんこ」等と呼ぶ。

どこの言葉が、どこの地域にあったのか、理解しがたい。

(K)



夢幼吉祥桜 山中長三郎

回想 我が青春

昭和二十三年（西暦一九四八年）、私はリュックサックに、約二斗の米を詰め込み、それを背負って、日本一長い青森駅ホームに立っていた。

八戸方面に行く夜行列車を待っていたのである。昭和二十年七月二十八日二十二時頃、B36米機百二十機が西南方面から来襲して、約九割が焼土と化し、一五、九三五戸が焼失、七四、二五八人が罹災、七四五名の死者、負傷者三〇〇名を出した青森市の焼け跡をながめ、旧正も近い青森市の寒空には星のきらめきがあった。

青函連絡船が岸壁に着くとホームは降船客であふれ、それに闇米を背負った人々が何処からともなく現われ、函館の人々と闇米の商談をしているようだ。待っている夜行列車がホームにすべり込んだので列車内の人となる。

青森始発上野行夜行列車の乗客は疎らであった。二人分の座席を占領して窓側に座り、リュックサックは通路側の席に置く。闇米を背負った数人が通り過ぎて、私の前の席に座ったのはチョップリ顔見知りの若い娘だった。

「鮫駅さ行くんだがあ」と声をかけてきた。「そうだよ」と答えると、娘から「私ばも連れて言ってくれ」と言われる。（これから娘をA子と書く）。

A子は「この態では、だれも米を持っていると気がつかないよ」と、ツル（マント）を少したくしあげると、身につけているチョッキのように縫い合わせた衣に米を入れて、あとは手に少々の米を持って来たと言う。どのくらい持って来たか聞くと、二斗はあると言ったA子は二斗の米を身につけていたのである。A子は安心したのか眠り掛けて居る。

私は一度も闇米を鮫駅に運んだこともないし、闇米の取り扱いはなれていない。闇米の一斉取締りにでも会ったら大変なことでと胸騒ぎがする。私の場合は自分の田圃から収穫した米であるから、警察に徴収されてもいいが、A子の場合は買い求めてきた米を運んでいるので心配である。

列車にゆられて鮫駅に到着、駅の校内は皎々と明るく、私達を迎えているようだった。駅内は売り買いの人でにぎわいとなった。私はA子と商談のまとまった人の家まで行き、金を受取り、帰り道にここは少し遠いので、次は駅の近くの人を探しましょうと言いつつながら駅に帰ると、嘉瀬の米売り仲間も居て、話しに花が咲いていた。

夜が明けたが、帰りの汽車での時間は充分ある。A子は突如「蕪島を見に行こう」と言う。私は「この冬空には一羽のウミネコもいないよ」と言ったが、「それでも行こう」とまるでダダツ子である。

ダダツ子と一緒に鮫駅より近い蕪島に行ってみると、ただ雪山の風景の朝である。A子はそれでもニコニコしていた。帰りに駅前のソバ屋で、熱い熱いソバを食べ合っただことは、今も思い出される。

その後A子とは三四回ほど鮫駅に行っている。A子はおしゃべりである。家庭は早くから父が死に、母の手にて数人の子を育てる耐乏生活に育ったと言う。

今はこうして闇米を背負って、お金を少しでも貯えて、友達のように裁縫を習って、お嫁さんに行く支度のために稼ぐのだと言った。

嘉瀬村の某家から特にとお嫁さんに望まれ、申し分のない縁談であったが、結婚式の費用とて無くお断りしたと言う。嫁に行けるのは、まだ先のことだと、よくしゃべるA子であった。

幾年後、私は嘉瀬駅より五所川原行きの汽車に乗ると、A子が手招きしている姿が目にとまった。席が空いて居るから来なさいと言う手招きだった。席に腰を下ろした。

「五所川原の街に行くの」と聞かれて、「これから寒くなるので袷巻でも買おうと思って」と話すと、一緒に行こうと言われ、駅を出て、街の店に入ると、A子は真つ先に袷巻を品定め、何枚も出させながら、その中から薄青色を選んでくれた。

A子は下駄の鼻緒や、つま革を並べ、品定めをしている。な

かなか決めかねたのか、私の方を見て「どれにしようかなあ」と言われて、私は「この方が似合うよ」と言ったら、それを買い求めた。

幾年過ぎて、突如としてA子から話が持ちこまれ、A子は私の嫁さんになってもよいとのことであった。村でも美人の評判娘である。私は心からうれしく有り難いと思ったが、しかし時すでに遅しである。

私は現在の妻と見合いにより縁談もまとなり、結婚式があと数十日に迫っていた。

私はA子に言った。「もし私の婚約が破談になったら、A子がよければ喜んでお嫁にします」と。当時の結婚は見合いで、恋愛結婚より多い時代であった。

私は見合い結婚の妻と楽しい日々を送り、長女も生れ、家庭も一段と賑やかになる。噂に依るとA子は最近嫁に行ったと言う。私は心からお幸せを祈らずにはいらなかった。

年月も流れて、長女・次女・妻の三人を連れて、芦野公園の花見に出掛けた。桜の花も満開である。桜を眺めて歩き、芦野湖岸に向って歩を進める。桜並木を長女は右手、次女は左母親の手を引っぱって急ぎたてた。

私も桜のトンネルに入ろうとした時、爛漫と咲き競う花の中に、A子の微笑する姿が浮きあがってきた。五秒ほどだった

うか、不思議な現象であった。

親子四人楽しい花見であったが、私はA子の姿は錯覚と思い、気がかりでもあった。そして村の人々のウワサに依ると、A子は嫁ぎ先では幸福な生活を送っていたが、病に倒れ、実家に帰り療養したが、その甲斐もなく、二十五才の若さで逝去したと聞かされた。

私の見たA子の姿は、錯覚か幻覚か、それとも成仏できぬ、さまよう霊か、あわれとも感じられた。A子の姿は再度私の前には、現わすことはなかった。

あの桜吹雪の舞い散る花のトンネル、桜並木の入口を私は、吉祥桜の道と呼ぶことにしている。

津軽言葉の謎

その三、津軽語は、同じ言葉でも、全然違った意味に分かれている。

「あがる」という言葉は「雨がひどく降る」ことであり、「戸が自然に開く」ことや「足で踏む」「家に入る」「学校から帰る」「入学する」「卒業する」「仕事が終わる」等の意味もある。

どうして、こんなに違う意味があるのだろうか。(K)

詩

「春の朝」

小山内トモ子

朝

カッコウの声で起される

一日の始まりに

まだ眠い目をこすり炊飯器にスイッチを入れ

犬と散歩。

今日も暑くなる様な気がする

土手を歩けばヨシキリがにぎやかに

声をきそい合っている。

すずめ、カラス、耳をすませば

鶯の声も聞こえてくる。

新鮮な空気を胸に吸いこむ

朝日が登るとき 今日一日が始まる。



ぶらり夕顔

短歌

漁火

櫛引 八千代

霜月

原田 喜一郎

くろぐろと聞せまりくる沖合ひに

三ツ四ツと漁火ゆるる

霜月の静かな夜に雪降りて

朝の庭木は花咲きしごと

ケキヨケキヨと梅雨の狭間を鷺の

声をききつつ浜宿泊り

古写真見るたび戦陣想ひ出し

時折夢に戦友の顔かほ

素枯れつつまだ咲きつづく露草の

花も終わらむ今朝の初霜

山西省の野越え山こえ谷を越え

食なき日のありしを思ふ

百姓の生活苦しきこと告げて

姫が選ぶ夕餉のしなじな

皺深き我が肌見れば亡き父の

齢すぎしをしみじみ思う

物ごとの忘る癖のままありて

明日があるさと一年終へる

今年こそ唐黍烏に突かれて

たまるものかと網を張りたり

俳句

おらほ

たかはしけん一

寒紅

峰 秀 女

わが渾名猪坪毛の山笑ふ

早苗饗に酔ひばおらほの岩木山

でんで虫扁平足を子に遺し

白神の御ン名いただき立佞武多

秋晴れて生きろ生きろと岩木山

寒紅やひとりと云えどねんごろに

眉ほどの月の傾むき冬紅葉

道祖神ぬれて一村片しぐれ

果つるなき海になだるる滝の水

行く春や賽の河原の吊り草鞋

母の日

北川 せつ女

徳利に一輪活けて太宰の忌

母の日やほほ紅色に志功の絵

風鈴の名句くるりと背を向ける

梅雨に入る鼻緒湿りの宿の下駄

秋風に塗り替えられて行く山河

老兵

工藤 速水

潮錆の破船に春の風立ちぬ

風待ちの船に灯りて神無月

懸け大根蟹田はどこも風のまち

昆布干す海女の仕ぐさに疑念なし

鷹翔ちて老兵いまでも沖守る

極楽

岩田 しげみ

思い出を重ねかさねて賀状書く

忠魂碑訪う人もなくちちろ鳴く

一本の紅葉に庭の影うごく

極楽の切符得るまで汗流し

飛入りの客も交りて炬燵談

青葉

芳賀 久子

眺瞰台夏鶯のこゑしきり

いにしえに浸る青葉の松陰道

香煙にかすむ地藏や草団子

日差し浴び音たて崩る雪の山

照紅葉沢の水浴び艶めけり

わたし

高橋 けん一

多情ですわたし献血出来ません

ろくでなし無頼浪人わたしの血

泥の手で生きているよと空にいう

枯木一本さらさら遺産など持たぬ

人はみなひとりなんだね雪のんのん

弥陀

泉谷 てい女

ふところに鬼では弥陀も手を貸さず

欲捨てた視野に明るい虹の橋

帰省子へ母はふところ開けておく

波瀾万丈父が遺した道しるべ

泥吐いたときから弥陀の掌の中に

夏帽子

成田 千セ

人の善さからから覗くのどちんこ

ウィンドーで招く手頃な夏帽子

手のひらに生きる痛みが書いてある

曇天へひき出しの疵出して見る

遊びぐせ抜けずじたばた師走くる

寒椿

櫛引 八千代

気どつたふりしても所詮は野辺の花

欲ひとつ迷いが一つ手の中に

散るまでの傷は見せまい花ざくろ

脱皮する手順が狂いまだ飛べぬ

さいはてに棲むのもさだめ寒椿

喜寿

瀬川新一

人の後やつと歩いて喜寿が来た

虫の声しみじみ聞ける齢となり

この春の平和の良さをかみしめる

人の世の荒波耐えた我が人生

候補者はここぞと福祉叫び出し

赤い糸

今ミサ

病む人に手をさしのべる有難さ

還暦の我が子見上げる丸い背

赤い糸たぐりよせたか嫁ぐ孫

日暮れば町の灯かりがチラチラと

夜の町カラオケ酒場のにぎやかさ

恋月夜

小山内 トモ子

散歩する犬も眠たげ春うらら

バツケ摘む春のかまりこ嗅いで見る

梅さくら咲いてほろほろ春こぼれ

ランドセルそろそろ慣れて道草くう

桜さくら歩くふたりの恋月夜

つるし柿

葛西敏江

病む父のむかし語りに耳をかす

巢の中で春を呼んでる軒雀

つるし柿乾くまもなく秋しぐれ

宮さまの嫁ぐ日和に稿を脱す

泥濘に足をとられる山の径